

哺乳方法が母牛の生殖器回復に及ぼす影響

黒毛和種繁殖経営では1年1産が目標とされています。分娩間隔を短縮し、生産性を向上させるにはどうすればよいのでしょうか？

新ETシステムでは自然哺乳で子牛を飼養されている和牛繁殖農家さんが少なくありません。分娩後間もない場合、生殖器の回復状況により同期化処置を施すのが困難なケースもあります。今回は、子牛の哺乳が母牛の生殖器回復に及ぼす影響について文献報告を交え紹介させていただきます。

子牛の哺乳刺激により母牛の発情回帰が遅延することが一般的に知られています。

子牛の吸乳刺激により母牛の下垂体からプロラクチンというホルモンが分泌され、排卵が抑制されるためとされています。

近年、メキシコの交雑種経産肉用牛における試験では、子牛に自然哺乳させている牛(15頭)、1日1回30分に制限して哺乳させている牛(14頭)、および哺乳させていない牛(7頭)で、それぞれの分娩後初回排卵までの日数はそれぞれ86.3日、68.8日、22.3日であったと報告されています。初回授精受胎率はといいますと、自然哺乳牛で20.0%、制限哺乳牛で42.9%、無哺乳牛では71.4%であったと報告されています。

(F.E.Amezcuca(2011) J Anim Vet Adv, 10, 195-199)

一方で、子牛の哺乳刺激により母牛の子宮回復が促進されることが知られています。

授乳により、オキシトシンというホルモンが分泌され、子宮収縮を後押しし、子宮回復を早めるためとされています。

黒毛和種雌牛で、“子牛に自然哺乳させていた牛”と“分娩直後に子牛を離乳させた牛”の子宮を摘出し、組織学的に検査した結果、自然哺乳牛では分娩後46日目には回復していたのに対し、離乳させた牛の中には分娩後62日目でも組織学的に子宮が回復していなかった個体がいたという事例も報告されています。(岡野彰(1980) 日本畜産学会報 51(4)284-292)

ET研究所ニュース

2012年 8月号



北海道でも連日30度を越える日々が続いております。

今回は哺乳が母牛に与える影響について記載させていただきました。後日、分娩後の卵巣の賦活化についても紹介させていただきます。

文責；全農ET研究所 中村

子牛に自然哺乳させている場合、分娩間隔を短縮させるには栄養管理の変更やホルモン剤の使用あるいは哺乳方法の変更などにより、卵巣の回復をいかにして早めるかが課題といえるかもしれません。